

スタッフから「この本よかったよ～」

「パリの空の下で、息子とぼくの3000日」
(辻 仁成 マガジンハウス)

離婚をし、10歳の息子と著者 とーちゃんの二人きりのパリでの生活を、息子が大学生になって自立するまでを記した子育て奮闘記。

「なんで僕だけ、こんなに寂しいんだ！」と叫ぶ多感な時期の息子と向き合い、感情をぶつけ合い、探り合いつつ、毎日丁寧に食事を作り、優しく日常を過ごす姿に共感し温かい気持ちになります。

一筋縄ではいかない子育ての難しさに、「そうそう！」と頷きながら、辻さんの大きな愛を感じ、読んでいるこちらも癒やされる一冊です。〈みかん〉

「にげてさがして」

(ヨシタケシンスケ 赤ちゃんとママ社)

とにかくユニークな絵本が大人気のヨシタケさんの絵本だから、今度はどんな切り口で楽しませてくれるのだろうと期待して手に取りました。いつものほんわかイラスト満載は同じなんですけど、なんか違う。内容が超マジ。だけど、いつもと同じように子どもへのそして全人類へのメッセージに溢れている。けど違う。これって、命に係わる、魂に係わるメッセージだ。「ひょっとして、ヨシタケさん、CAPのこと知ってました？」って思うぐらい、メッセージが共通している。でも、最初の切り口が全く違う。「そうぞうりよくをつかうのがてなひと」が登場する。なんて素敵な切り口だ。けど、やっぱりどの作品からも感じられる、多様性やSDG'Sをくると一飲みにして全人類への愛に溢れている、って言ったら大袈裟？〈M.S.〉

《CAP 東埼玉 2022 年度実績》

ワークショップ参加者 子ども 1092人・おとな 255人
(就学前幼児・小学生・中学生・その保護者・先生方など)

【編集後記】

新型コロナウイルス感染症が5類になり、マスクを外す人も増えてきました。「大変なこと」が過ぎ去った後、(まだ過ぎ去ってはいませんが) 社会の方向が「するり」と「復興」「再生」、「回復」に変わる。その時にいつもいつもおざなりにされるのは「検証」です。公正で徹底的な検証は、次世代への責務。なのに「まあ、もう次に」という空気がそれを阻む。頑なに立ち止まって拳を握りしめる5月。(k)

東埼玉的の日常 ⑭ by あまぐり



3年ぶりに やっと...



もとの かたちに戻れるよ... と思う

CAPについて もっと詳しく知りたい方は
NPO 法人 CAP センター・JAPAN
<http://www.cap-j.net/>
CAP東埼玉について知りたい方は
<https://cap-higashisaitama.crayonsite.info/>
へ 今すぐクリック

CAP 東埼玉では

多くの方にCAPを知っていただくために、CAPについての情報提供や、学校の授業・PTAの家庭教育学級・公民館などで、CAPワークショップを行っています。

また、子どもの教育・環境などのさまざまな問題について語り合える仲間づくりをめざして活動しています。

大好き!

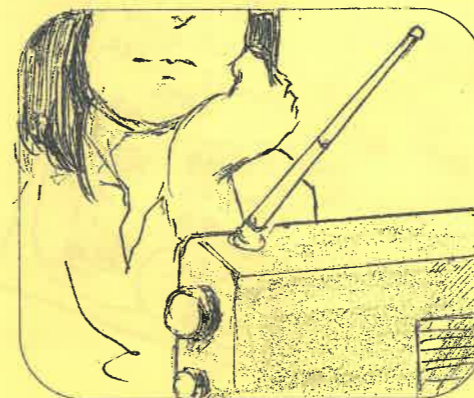
会報2023 年5月発行

<https://cap-higashisaitama.crayonsite.info/>

CAP(キャップ)東埼玉
[NPO 法人 CAP センター・JAPAN 登録団体]

代表 栗田みえ子
事務局 T 090-6177-6858

CAPとは Child Assault Prevention (子どもへの暴力防止) の頭文字をとったもので、子どもがさまざまな暴力から自分の心とからだを守る暴力防止のための予防教育プログラムです。



先日、友人たちとランチをしていた時、BGMで懐かしい洋楽がかかっていました。昔ラジオでよく聴いた曲... 児童虐待について歌ったスザンヌ・ヴェガの「Luka」です。

この曲がラジオから流れていた1987年頃、日本では「児童虐待」という言葉が日常会話に出てくることはほとんどなく、「そんなことは日本ではめったに起きない」と思われていました。(実際には児童虐待はありました。)

日本はその後の1994年、子どもの権利条約に批准し、2000年には児童虐待防止法(その後5回の改正を重ねています)が施行されました。

けれど、虐待やいじめ、性暴力など、子どもが被害にあう事件はいまだに起きています。

「Luka」から36年。どれだけ社会は変わったのでしょうか。状況に無力感でいっぱいになる事もあります。けれど良い変化もあるのです。そこに目を向けようと思います。一緒にランチをしている友人たちに「これって 児童虐待を歌った曲なんだよ」と自然に話すことができる社会になったのだから。(Ru)

できることを始めよう

『ケーキの切れない非行少年たち』(宮口幸治 新潮社)という本があります。(続編も刊行)

精神科病院や医療少年院に勤務した著者が、「境界知能」の人々の抱える知的機能の困難を明らかにし、どのように支援をしたらよいかを提案しているのですが、経験豊富な著者であっても失敗の連続であり支援が一筋縄ではいかないことがよく分かります。

この本を読んで、「私たちにできることは「理解しようとする」と「寛容であること」ではないか」と思いました。世の中、個人の努力だけで解決できる問題はそれほど多くありません。様々な外的要因でままたまなることは多々あります。ハンディを抱えた人々はいっそうのことです。

昨今「自己責任」の一言で助けを必要とする人を切り捨てる風潮があるけれど、「お互いさま」の精神で生きることが私たちができる 第一歩ではないかと思うのです。(N)



